

## マンガを活用した国語教育（3）

－小学校の古文教育－

早野慎吾

(都留文科大学)

The Study on Japanese Language Education Using Comics(3)

—Ancient Literature Education for Primary School Children—

Shingo HAYANO

### 1. はじめに

2011年度から小学校にも古典(古文・漢文)教育が導入された。本稿では、まず小学校教育において古文がどのように扱われているかを概説し、さらに教師として必要な古文知識を論じる。筆者は、早野・宮田・松井(2018a)、早野・宮田・松井(2018b)においてマンガを活用した国語教育について論じたが、本稿では、マンガを活用した小学校の古文教育を論じる。ここでは職業マンガ家の作品でなく教師が作成するマンガについて扱う。

マンガを取り入れた古文教育の研究に早野(2009)『「土佐日記」の研究と教育』がある。これは、2004年から2009年にかけて筆者が宮崎大学の教員養成系の学生に対して行った講義録で、受講した学生のレポートも掲載されている。本講義は、『影印本 土左日記（影印本シリーズ）』（萩谷朴氏編 新典社 1968）をテキストとして使用し、内容を解説した上で、「マンガ・イラスト・図などを使用してわかりやすく児童生徒に古文を解説する方法」をテーマに行っている。早野(2009)のまえがきには、レポートは「小学校の教員を目指す学生は小学生向き、中学校の教員を目指す学生には中学生向きの内容にするよう指示をした」と書かれており、受講生は、4コママンガやイラストを駆使して作品解説をしたレポートを提出している。幼少時からマンガを愛好している受講生が多く、優れた現代語訳や解説を付けたレポートもある。本研究では、早野(2009)掲載の学生レポートを紹介しながら論じる。

### 2. 学習指導要領

まず、小学校・中学校における学習指導要領における古典に関する記述を記載する。小学校学習指導要領（平成10年12月告示）の国語において古典の学習は、「第2 各学年の目標及び内容【第5学年及び第6学年】2 内容【言語事項】エ 文語調の文章に関する事項（ア）易しい文語調の文章を音読し、文語の調子に親しむこと。」とある。

中学校学習指導要領（平成10年12月告示）の国語では、次の記述がある。

#### 第3 指導計画の作成と内容の取扱い

（4）第2の各学年の内容の「C 読むこと」に関する指導については、次の事項に留

意すること。イ 古典の指導については、古典としての古文や漢文を理解する基礎を養い古典に親しむ態度を育てるとともに、我が国の文化や伝統について関心を深めることにする。その教材としては、古典に関心をもたせるように書いた文章、易しい文語文や格言・故事成語、親しみやすい古典の文章などを生徒の発達段階に即して適宜用いるようにすること。なお、指導に当たっては、音読などを通して文章の内容や優れた表現を味わうことができるようにして、文語における言葉のきまりについては、細部にわたることなく、教材に即して必要な範囲の指導にとどめること。

古典教育は、高等学校から本格的に行われるため、小学校では「親しむ」、中学校では「関心を深める」「関心をもたせる」等のことが指導要領には書かれている。

### 3. 教材研究

ここでは、筆者の協力校である東京都東大和市立第十小学校が使用している『ひろがる言葉 小学国語』(教育出版)を中心に古典作品が教材としてどのように扱われているかをみてみる。



図1 『ひろがる言葉 小学国語』5下 pp. 32-33

『ひろがる言葉 小学国語』では、古典として「漢文に親しむ」(5上)、「「古典」を楽しむ」(5下)、「春はあけぼの」(6上)、「言葉は時代とともに」(6下)が扱われている。タイトルからもわかる通り、古典に親しむことを目的としている。図1は、「「古典」を楽しむ」の冒頭部分であるが、この単元では、『竹取物語』『平家物語』『伊曾保物語』の一節を取り上げて、現代語訳と簡単な作品解説を行っている。現代仮名遣いと違う表記

(歴史的仮名遣い)は、ルビで現代仮名遣いを示している。

古典作品は、『ひろがる言葉 小学国語』で「文化」という共通テーマのもとに扱われており、教師用指導書(『ひろがる言葉 小学国語5下 解説・展開編』教育出版)では、「古典」を楽しむについて、「日本の古典の中には、さまざまな物語がある。ここには、小学5年生にも比較的親しみやすいと思われるものを、数点取り上げた。それらの原文の一部にふれながら、その時代を感じ取ったり、それぞれの時代の人々の生活や文化の一端にふれたりするような学習をとおして、今の自分たちの「物語」との関わりを考えさせて行きたい。」(p. 86)と解説されている。

冒頭の数行で「その時代を感じ取ったり、それぞれの時代の人々の生活や文化の一端にふれたりする」ことは不可能で、数行の古文で「今の自分たちの「物語」との関わりを考えさせ」ることは無理である。たった数行の原文で時代背景や文化を感じ取れるほど古典作品は簡単なものではない。教師は、そのことを念頭におく必要がある。

『ひろがる言葉 小学国語 6上』「春はあけぼの」では、原文とその現代語訳を対応させて解説している(図2)。「声に出して読み、自分の思いを書きましょう」というテーマが掲げられており、指導要領の「易しい文語調の文章を音読し、文語の調子に親しむこと」に合わせた内容になっている。ただし、現代語訳が付いているからと言っても、児童にとって古文は意味のわからないお経のようなもので、音読して親しめるかと言えば、それは困難である。むしろ古文は意味のわからないものという印象や先入観を児童に与えかねない。

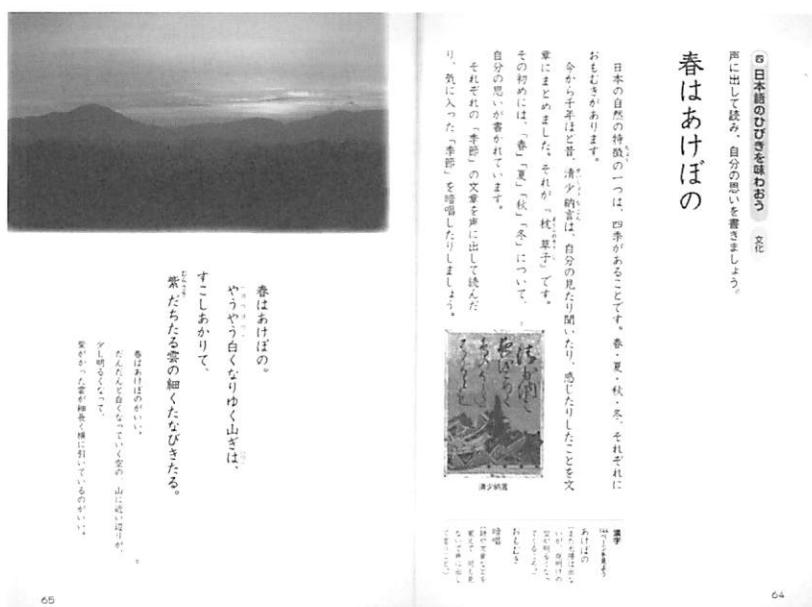


図2 『ひろがる言葉 小学国語』6上 pp. 64-65

筆者は、小学生には現代語訳だけを提示して、時代背景や文化を解説することが優先されるべきと考えている。古典作品に親しむだけなら、現代語訳だけで十分である。仮に、

原文を提示するのであれば、古文の現代語訳を提示して作品解説(作品成立期の文化や歴史的背景を含む)をした段階で、部分的に原文(この場合活字版)を提示するのが良いのではないかと考える。また、作品が成立した時代や文化を理解させるためには、社会科の授業とリンクさせると効果的である。文法解説や語彙の解説もなく原文を提示すれば、マイナス面も大きい。しかし、小学生に古文の文法解説するのも抵抗がある。

### 3. 現代語訳

図2の「春はあけぼの」の現代語訳は、「春はあけぼのがいい。」となっている。これは、「春はあけぼの」が「いとをかし」の省略とする解釈からくるものである。意味的には、「春はあけぼのがいい。」でもいいが、「～がいい(いとをかし)」を付けた現代語訳は作品的な価値を損ねる。「春はあけぼの」を例に、現代語訳の重要性を述べる。『枕草子』の冒頭部分は、各教科書教材で用いられており、以下の訳が付けられている。

『国語 五 銀河』(光村図書 : p. 34)「春は明け方がよい」

『小学生の国語六年』(三省堂:p. 67)「春は明け方(がよい)。」

『みんなと学ぶ小学校国語5年上』(学校図書 : p114)「春はなんといつてもあけぼのがいい。」

『新編 新しい国語 5』(東京書籍 : p. 190)「春はなんといつても明け方。」

橋本治(1987)『桃尻語訳 枕草子』では、「【春は曙】ただこれだけ。それがいいんだとも悪いんだともなんだとも、彼女は言っていない。」(p. 4)と記載されているが、その通りである。しかし、『新編 新しい国語 5』以外はの教科書教材は勝手に「～いい(よい)」を付けて訳している。

日本語学や日本語教育学では有名な「うなぎ文」(金田一 1955、興津 1978)と呼ばれる文型がある。料理を注文するとき、「キミは何にする」と聞かれ「ボクはウナギだ」と答えたという例を代表として「N<sub>1</sub>はN<sub>2</sub>。」の文型を「うなぎ文」という。「春はあけぼの」はまさに「N<sub>1</sub>はN<sub>2</sub>。」の文型であるが、「ボクはウナギだ」との違いは、質問もなしに唐突に「N<sub>1</sub>はN<sub>2</sub>。」の文型が用いられていることである。前触れもなしに提示された一文に、読者は一瞬「何のことか」と感じてしまう。そのため、現代語訳ではご親切に「～がいい」を付けて、ネタをばらしてしまう。

この冒頭部分は、「春はあけぼの」で文を止め、結論を述べないことで「春はあけぼのが何なのだろうか」と読者の想像を駆り立てる。結論を述べないことで読者は先の文章を読みたくなる。テレビ番組などで結論や結果を知りたいという視聴者の心理をあたり、結論や結果を先延ばしする手法がよく取られるが(コマーシャルを挿むこともある)、平安時代に書かれた隨筆で同じようなレトリックが用いられているのである。

『枕草子』の冒頭だけをみても、清少納言は読者に読みたくさせるテクニック(「読ませる」テクニック)を持っていたことがわかる。平安中期にこのようなレトリックを使った隨筆を書けたのであるから、清少納言の優れた文才がわかる。「春はあけぼのがいい。」と現代語訳を付けてしまうと、清少納言の優れたレトリックが失われ、平凡な文章となってしまう。橋本治(1987)では、「春って曙よ！」との訳を付けているが、非常に優れた現代

語訳といえる。言語学者の柴田武は橋本治(1987)を「こんなにこの本が人気を呼んだ秘密は、一つには、枕草子の文章をすなおに読んで、現代に繋げたところにあると思う。」(柴田 1995 : p. 152)と評しているが、筆者も同感である。意味を伝えるだけの現代語訳は、作品の価値を損なう可能性がある。小学生には、原文を提示するよりも、優れた訳文を提示して、その作品背景を解説する方がよい。その方が、古典作品に対する素地ができる。

#### 4. 教師の知識

教師は、できれば学生時代に影印本に触れておく方が良い。早野(2009)で報告した講義(以後本講義)は、あえて影印本『影印本 土左日記(影印本シリーズ)』を用いているが、これは教師として必要な古文知識を身につけさせるためで、小学校に導入される古典教育に備えて行った講義である。

『影印本 土左日記(影印本シリーズ)』は、青鞜書屋本を写真複製したものであり、基本は仮名で書かれており漢字は促音・撥音等(「日記」「一文字」など)の特殊音節などに使われているだけで、初心者にも読み解しやすい。原著者である紀貫之の自筆本から直接書きした写本(為家筆本)が現存しており、青鞜書屋本は為家筆本に対し独自誤謬が4カ所、後人の補筆による転化が1カ所と判明している。つまり、この影印本は、為家筆本をほとんど複製本と言えるほど忠実に転写した青鞜書屋本を写真複製したものであり、作品成立時の言語状況を知るよい資料となる。

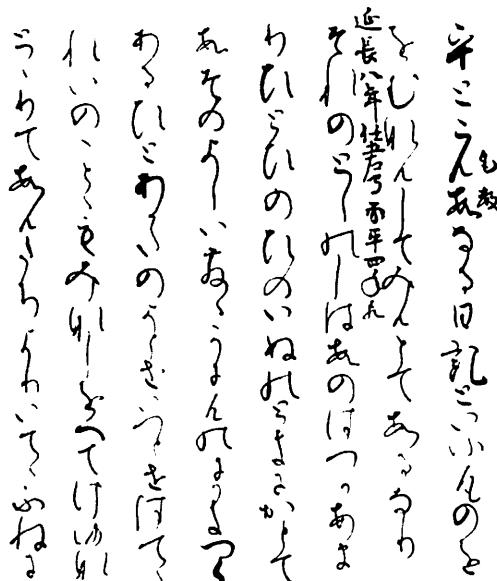


図3 『土佐日記』冒頭部 (『影印本 土左日記』p. 17 より)

図3では「日記」(1行目)だけが、漢字で表記されている。これは、促音(促音便)が仮名表記できなかったためと考えられ、貫之は「日記」を「ニッキ」と発音していたことがわかる。活字本では「日記」を「にき」とルビを振っているものが多いが、影印本を使う

ことによって活字ではわからなかつた事実に気づくことがある。学校教師は、世に通用している解釈でも、すべて正しいわけではないことを認識していなければならない。

『土佐日記』は仮名文学と言っても変体仮名なので、慣れるまでは変体仮名集を用いて一字ごとに調べる事になり、漢字から仮名が成立した過程を学習することができる。6年生(国語科)では、各教科書教材で仮名の成立(日本語の文字)について解説する単元がある。図4は、『小学生の国語6年』(三省堂)の例であるが、この単元でも適切な内容を教えられる知識を身につけることができる。



无	和	良	也	末	波	奈	太	左	加	安
えん	わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ
	利	美	比	仁	知	之	幾	か	以	
たり	み	み	ひ	じ	ち	し	き	く	い	
留	由	武	不	奴	州	寸	久	宇		
る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	つ	く	う		
礼	女	部	称	天	世	計	衣			
れ	女	ぢ	ぢ	て	せ	け	え			
れ	め	へ	ね	て	せ	け				
遠	毛	保	乃	止	曾	己				
き	よ	ほ	の	す	ぞ	こ				
を	ろ	よ	も	ど	そ	お				

図4 『小学生の国語6年』 p. 200

#### 4. マンガを活用した古文教育



図5



図6

早野(2009)では、学生らがマンガ・イラストを活用した例が提示されており、そのいくつかを紹介する。すべて、児童生徒に向けて描かれたものである。

図5、図6は冒頭の「男もする日記(につき)」というものの女もしてみむとするなり。」の解説に使用されたイラストである。『土佐日記』冒頭部分は、学校教育では、伝聞推定の「なり(終止形接続)」と断定の「なり(用言の連体形接続)」が使われている例として有名な一文である。この一文には、さらに面白い現象が含まれている。「男もする」との表現である。「Aもする」といえば、A以外の存在がその行為をしていることが前提となる。△が「男」なら、「男」以外の存在がその行為をしていなくてはならない。筆者は、この箇所を早野(2011)において、以下のように解説した。

この一文(『土佐日記』の冒頭)を読んで、はたと違和感に気づく。「男もする」という表現。男もするということは、女がしていることが前提となる。したがってそこは「男の(男が)」としなければならない。さらに「女も」とあるので、男なのか女なのかはっきりしてくれと言いたくなる。作品中に男性的な漢文訓読体が多いのも気になる。現在はニューハーフ(和製英語)という概念がある。この作品はさしづめニューハーフの日記ということになるのであろうか。(p.39)

この内容を学生に説明すると、そこに関心を持った学生も多く、「おねえ的土佐日記」等のレポートが複数提出された。橋本治(1987)『桃尻語訳 枕草子』ではないが、女性を装った男を強調しており、非常に面白い現代語訳を受けた学生もいた。ここでは、「おねえ的土佐日記」と題したレポートの現代語訳(冒頭部)を紹介する。訳の正確さは抜きとして、非常に面白い。

男?も書くって聞いている日記って言うのを、女?の私もやろうと思って、書いたの~。  
任期が終わる年の十二月二十一日の午後八時に出発う~! その旅の様子を紙に書いておくわよ~ん。(早野 2009:p255)

図7は、「土佐日記新聞」との題が付けられたレポートで、対象は小学校高学年と書かれている。作者(貫之)に時代を超えてインタビューするという形式で作品解説を行っている。記載内容は対象を考慮する必要があるが、児童に古文の世界を親しませるにはよい方法のひとつであろう。

図8～図10は、4コママンガで解説したものである。図8は、『土佐日記』は紀貫之が女性に仮託して記したこと表現したマンガである。

図9と図10は、『土佐日記』12月22日の「二十二日に和泉の国までと、たひらかに願立つ。藤原のときざね、船路なれど馬のはなむけす。上中下酔ひあきて、いとあやしく、塩海のほとりにてあざれあへり。」の記述をマンガで表現したものである。「塩海のほとりにてあざりあへり」(図9)「船路なれど馬の鼻むけす」(図10)は、共に貫之の洒落である。「塩海のほとりにてあざりあへり」は「あざれる(餒:魚や肉が腐る)」と「あざる(戯:ふざける)」を掛けた洒落で、「あざれない(腐らない)はずの塩海のほとりで、あざれ合っている(ふざけあっている)のは、これ如何に」との内容である。「馬の鼻むけ」は、旅立つ人の前途の無事を祈って、旅行者と酒食をともにすることであるが、馬の鼻を進行方向に向けた習慣を語源とする。「海路なのに、馬のはなむけ(送別会)とは、これ如何に」

との内容である。現代の感覚では、馴熟落であり、いわゆるオヤジギャグ<sup>\*1</sup>である。このような例を使って、児童を古文の世界に誘う手法もある。



図 7



図 8



図 9



図 10

文章にマンガを挿入したレポートが多かったが、マンガだけで概説した学習マンガ<sup>\*2</sup>を提出してきた学生もいた。マンガの描き方がわからず苦労した学生もいた。このようなとき「まんがの方法」『ひろがる言葉 小学国語5下』(pp79-87)のような単元が活かされる。早野・宮田・松井(2018 b)で、「国語科だけでなく図画・工作や美術科の授業でもマンガを取り入れてみたらどうであろうか。実際にマンガを描いてみてもよい。」(p. 36)と論じ

たが、簡単なマンガの手法を教師が習得していれば、教育現場での指導方法が大きく広がると思われる。

教科書教材に関連したマンガを教科書教材の出版社が提供している例もある。図11は、光村図書が発行している広報誌『国語教育相談室』に掲載されたマンガである。これは、『国語 五 銀河』(光村図書: pp. 56-62)「古典の世界(一)」の授業を解説したマンガである。一コマ目に「古典の授業経験がない先生方代表」が登場する形で話が進む。つまり、教師向けのマンガである。筆者は、教師に対しての学習マンガは想定していないのであるが、古典・漢文に対しての基礎知識が少ない教師が少なからずいることの表れと解釈できる。



図11 『国語教育相談室』 No. 70(光村図書 2010) pp. 32-33

## 6. おわりに

本稿では、小学校における古典教育(古文教育)の状況と、教員として必要な知識、そしてマンガを活用した古文教材の例を提示した。

筆者は、小学校での古典教育は賛成だが、現在行われている原文を提示して音読させるという指導要領の内容には賛成できない。小学校では、現代語訳を通して古典作品の世界観や文化的背景を解説し、中学校の古典教育に繋げる方が良いであろう。これは外国文学にも言えることで、例えばJ. K. ローリング(1997)『ハリー・ポッターと賢者の石』(Harry Potter and the Philosopher's Stone) にしても、数行の原文を提示するよりも、日本語訳(たとえば松岡佑子訳(1999))をじっくり読む方が『ハリー・ポッター』の世界を知ることができる。数行の原文を音読したところで『ハリー・ポッター』の世界を味わうことは

できない。

数行の原文で「それらの原文の一部にふれながら、その時代を感じ取ったり、それぞれの時代の人々の生活や文化の一端にふれたりするような学習をとおして、今の自分たちの「物語」との関わりを考えさせて行きたい。」という指導書の内容が如何に無謀なことは、外国語教育を考えてみてもすぐにわかる。英語を学習する場合でも、英語で表現されている内容の基礎知識があると理解しやすいように、古典作品の背景等の基礎知識を解説しておくと、次の段階(中学校の古典教育)に繋ぎやすくなる。

図11のマンガからもわかるが、小学校の教師には、古典教育が行えるだけの古典知識がない人たちも少なからずおり、このような状況は、小学校に古典教育が導入されることが公表された時点で予測できたはずである。筆者は、古典教育に適応できる教員養成のための授業を影印本を用いて行ってきたが、小学校の教員を目指す人は、学生時代に影印本をある程度読めるだけの基礎知識を習得することが望まれる。教師が古典作品の知識を持ち、マンガを活用した教育法を開発できれば、古典作品に関心を持つ児童も多くなるであろう。

### 【注】

- 1 「オヤジギャグ」とは、活躍層以上の男性が使うと思われている、安直なギャグのことである。作品成立期に、このような洒落がどのように評価されていたのか知りたいところである。
- 2 早野・宮田・松井(2018)では、「学習マンガ」を「歴史や経済など、以前は文章で表現された内容がマンガでわかりやすく表現されたもの」(p. 30)と定義したが、当然、教育関係の内容を解説したマンガも学習マンガである。

### 【参考文献】

- 興津敬一郎(1978)『「ボクハ ウナギダ」の文法』くろしお出版  
金田一春彦(1955)「日本語」『世界言語概説(下)』研究社  
柴田武(1995)『日本語はおもしろい』岩波書店  
萩谷朴編(1968)『影印本 土左日記』新典社  
橋本治(1987)『桃尻語訳 枕草子(上)』河出書房新社  
早野慎吾(2009)『「土佐日記」の研究と教育』自家版  
早野慎吾(2011)『宮崎ことばの散歩道 ずんだれ編』みやざき文庫 75 鉱脈社  
早野慎吾 宮田好恵 松井洋子(2018a)「マンガを活用した国語教育(1)－表現力育成の教材として－」『言論の研究と教育』1  
早野慎吾 宮田好恵 松井洋子(2018b)「マンガを活用した国語教育(2)－授業実践から－」『都留文科大学紀要』88  
青山由紀・吉永直子(2010)「古典って楽しい！1 竹取物語」『国語教育相談室』No. 7 光村図書  
J. K. ローリング著 松岡佑子訳(1999)『ハリー・ポッターと賢者の石』静山社

(2018年2月27日原稿受理)